

あなたは主イエス様の再臨を待ち望みますか？

2007. 9. 30 (日)

石川・福井喜びの集いにて  
ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

マタイの福音書 25章1節から13節

「そこで、天の御国は、たとえて言えば、それぞれがともしびを持って、花婿を出迎える十人の娘のようです。そのうち五人は愚かで、五人は賢かった。愚かな娘たちは、ともしびは持っていたが、油を用意しておかなかった。賢い娘たちは、自分のともしびといっしょに、入れ物に油を入れて持っていた。花婿が来るのが遅れたので、みな、うとうとして眠り始めた。ところが、夜中になって、『そら、花婿だ。迎えに出よ。』と叫ぶ声がした。娘たちは、みな起きて、自分のともしびを整えた。ところが愚かな娘たちは、賢い娘たちに言った。『油を少し私たちに分けてください。私たちのともしびは消えそうです。』しかし、賢い娘たちは答えて言った。『いいえ、あなたがたに分けてあげるにはどうも足りません。それよりも店に行って、自分のをお買いなさい。』そこで、買いに行くと、その間に花婿が来た。用意のできていた娘たちは、彼といっしょに婚礼の祝宴に行き、戸がしめられた。そのあとで、ほかの娘たちも来て、『ご主人さま、ご主人さま。あけてください。』と言った。しかし、彼は答えて、『確かなところ、私はあなたがたを知りません。』と言った。だから、目をさましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないからです。」

昨日の題名は何であったかと言いますと、『あなたは安心して死ねますか？』でしたが、今日の題名は、『あなたは主イエス様の再臨を待ち望みますか？』です。これもまた、非常に大切な質問ではないかと思えます。

司会の兄弟の話によりますと、昔は、妥協せず主に従った人たちがいたそうです。今は仏教の教えそのものになってしまいました。いったいどうしてでしょうか。それは、信じる者が妥協してしまったからです。

昔アフリカには、イエス様を第一にする人たちが考えられないほど大勢いました。しかし今は、その信者だった人たちが完全にイスラム教徒になったのです。どうしてでしょうか。つまり、「イエス様だけを見よう」とする人々が少なくなってしまったからです。トルコの国もいわゆるキリスト教の国でした。けれども今は、完全にイスラムの国になってしまったのです。どうしてでしょうか。それは信じる者が妥協してしまったからです。何と悲劇的なことでしょう。

結局この問題は、世代、つまりジェネレーションの問題ではないでしょうか。親はイエ

ス様を大事にしても、子どもはなかなかついて来ません。どうしましょうか。その解決は……。もちろん祈りしかないのですが、親は子どもが小さいときから次の二つのことを教えるべきです。すなわち、

第一番目。あなたのわがまは何があっても通りません。

第二番目。同情はいつも100%駄目。あなたを心から愛していますから同情しませんと。

子どもは可愛いものです。誰でも自分の子どもが可愛いので、子どもに同情しないことは間違いではないかと多くの親は考えていますが、この考え方こそ間違いです。愛のかたまりである主ご自身は、絶対に同情なさいません。それは本当に子どもを愛しているからです。世界中の親が自分の子どもを思うように育てられません。それは無理です。けれど、祈り続けなくてはなりません。妥協せず主にだけ頼ると、主は必ず恵んでくださいます。

昨日、M兄弟は、「狭い道」と「広い道」について話されました。広い道の行く先は地獄です。狭い道の行く先は天国です。

地獄へ行く人たちとは、いわゆる未信者と呼ばれている人たちで、信じられないからではなく、信じたくない人たちのことです。光よりも暗やみを愛する人たちです。何があっても頭を下げたくない人たちです。つまり、天国へ行きたくない人たちだけです。正直になりたくない人たち、何かを隠す者は、本当に可哀相ではないでしょうか。

しかし私たち救いにあずかった者は、イエス様を信じ、救われることだけでは十分ではありません。新約聖書の手紙を読むとはっきり分かります。手紙を書いた人たちは、本当に悩みながら、苦しみながら、おそらく泣きながら手紙を書いたと思います。せつかくイエス様の救いにあずかったにもかかわらず、多くの信者がなかなか成長しなかったのです。信じる者の中でも、はっきり二種類に分けられます。

パウロは、「私はいつもあなたがたすべてのために感謝しています」と語っていますが、素晴らしい言葉です。私はこの部屋にいる信者の霊的状态はよく分かりませんが、少なくとも吉祥寺について考えると、私はパウロのように言えません。すなわち、「私はいつもあなたがたすべてのために神に感謝する」と。もちろんパウロも、ある兄弟姉妹のことを考えたときにだけ、心から言えたのでしょう。

しかし彼の手紙を読むと、「私は困っている」、「私は悩んでいる」、「私は苦しんでいる」、そういう言葉がたくさん出てきます。パウロは未信者に対しイエス様を紹介するためには、そんなに力も時間も必要なかったようです。けれども救われた人々を導くために、パウロは本当に苦労しました。

どうしてその違いがあるかと言いますと、結局、イエス様の再臨についての考え方よっての違いではないでしょうか。

イエス様によって新しく生まれ変わった人たちは、みな、「イエス様は来られます」と。しかし、聖書は何回も語っていますから。けれども、「いつになるか分からない」と。

期待をもって待ち望むことこそ大切です。悪魔でさえもイエス様の再臨を信じています。疑い得ない事実です。けれども、悪魔の目的は、みんなのんびりするよう、みんな妥協するよう、みんな眠っているように、なのです。

今読んでいただきました個所の中で、「みな」という言葉が出てきます。  
マタイの福音書 25章5節

「花婿が来るのが遅れたので、みな、うとうとして眠り始めた。」

「みな」です。五人だけではありません。「みな」です。

ですから、今日の題名は13節でしょう。『目をさましていなさい』。最も大切な命令です。「用意が出来ているのですか?」。あなたは愚かか、賢いかのどちらなのでしょう。

ドイツのアドルフ・ヒットラーは、確かにメチャクチャな男でした。悪霊によって支配されていたのです。占い師からいろいろなことを聞いた男でした。けれども、時には良いことを言ったこともあります。「備えあれば憂いなし」と。まさにその通りです。

ですから、「目をさましていなさい」という主の呼びかけは本当に大切です。

今の世界は、末の世になりました。今後はどうなるか分かりませんが…。私は明日またドイツへ行きます。いつもがっかりすることは、いわゆるキリスト教の国々の人々はほとんど、主から離れているからです。みことばから離れています。妥協せず主にだけ頼る人々、意識してイエス様の再臨を待ち望む人々は、非常に少なくなっています。

二十七の国々（ヨーロッパ連合の国々）は、現在すでに一致しているのです。それは、「新しい憲法の中で、『神』という言葉を入れないようにしましょう。神がいるかどうか分からないし、必要もない。私たちは心を一つにすれはうまくいく」という彼らの考え方なのです。しかし100%うまくいかないでしょう。すべてを支配する者が近いうちに出てくるでしょう。それはいわゆる反キリストです。

けれど、その前に私たちは早くイエス様と一緒にになりたいですね。ですから、初代教会の人々のように、「主イエスよ、早く来てください」と祈り続ければ、私たちは解放され、イエス様も大いに喜んでおいでになると思います。

私は以前、黙示録について、吉祥寺で何年間か話しましたが、その時いろいろな本を読みました。たぶん黙示録について三十六冊読んだのですが、そのときがっかりしたことは、「空中再臨」についてドイツの本の中であまり書かれていなかったことです。もちろん、公の再臨のことを考えなくてはいけません。けれど、公の再臨のために待つべき人はユダヤ人です。イスラエルの民です。私たちではありません。すなわち、私たちにとって大切なのは、いわゆる「空中再臨」です。

確かに、聖書の中で「空中再臨」についての個所はあまり多く書かれていないのです。それは、イエス様もおもにユダヤ人の将来について語られたからです。

しかし「空中再臨」について、みなさんがもっともよくご存じの個所は、テサロニケ第一の手紙ではないでしょうか。テサロニケで、イエス様を信じ、救われ、妥協せず主に従った人々の中で、いろいろな人々は病気になる召されたのです。つまり一足先に召されたのです。いったいどういう話かと、彼らはパウロに質問しました。それで彼は返事として書いたのです。

テサロニケ人への手紙・第一 4章13節から18節

眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずで、私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。

「眠った人々」とは、もうすでに召された、主イエス様を信じる人々です。

「あなたがたが他の望みのない人々のように、悲しみに沈むことのないためです」と。そういう信者がいるからです。

「私たちは主のみことばのとおりに言いますが」と。それは私の考えでもないし、勉強したことでもないし、主から与えられたことだと。

救われていながら悩んでいる人たちを、どのように慰めたら良いでしょうか。それは、「主の日は近いからもうちょっとの忍耐だと考えるなら、また嬉しくなりますよ」と。

明日のことは何が起こるか、確かに誰にも分かりません。私たち信じる者は遠い将来のことは分かります。『私たちは、いつまでも主とともにいる』と。本当はそんな資格はありません。しかし、みことばの約束を考えればもう…。

私たちは天国についてどんなに考えても想像が出来ません。言葉では言い尽くすことが出来ません。ただ、「イエス様を信じたのは良かった！」としか言えないと思います。イエス様を、「人の子」として、「神の小羊」として、永遠に亘って崇めざるを得なくなります。

先日、御代田でN兄にも言ったのです。「あなたは生きていて仕事がありませんよ。天国で指揮者は必要ありませんね」と。(笑)彼はちょっと驚いた顔をしたのですけれど。(笑) 医者も必要ありません。(笑)

先ほど読みました第一テサロニケの4章13節から18節に、三つのことが書いてあります。

・第一番目。主イエスご自身が天から再びお出でになります。

教会歴史を読むと、三百何十人の人たちそれぞれは、「おれは再臨したキリストだ」と言い張りました。韓国の文鮮明もそうなのです。「おれは再臨したキリストです」。「ちょっとあなたの手と足を見せてください。釘の痕が無ければ、あなたは偽者です」と。考えられないような話ですね。

しかし、十字架の上で犠牲になられたイエス様ご自身が、天から再び来られます。もう一度死ぬためではありません。迎えるためです。

・第二番目。イエス様にあつて先に死んだ人々のからだがよみがえります。

灰になったからだはあまり役に立ちません。全然使いものになりませんが、主の目からご覧になると大切なのです。ある人々は、「死でもって全部終わりだ」と言います。そして自分のからだの灰を海の上にかくようになるのです。そうすれば必ず「終りだ」とその人は思えるのです。主にとって、そのからだの灰を集めることは簡単です。私たちもいつかはよみがえりのからだ、栄光のからだを持つようになります。

・第三番目。主の恵みによって救われた、生き残っている一人一人が変えられます。

そのときはじめて、「私たちはイエス様に似た者となる」と書いてあるのです。わがままな私たちにとっては、いくら考えてもあり得ないことと思えます。でも、イエス様はわがままを知らないお方でした。イエス様はいつも、「お父様、今ご覧になったでしょう。お聞きになったでしょう。わたしは何を話したらいいのかわかりません。教えてください」と祈ってから、初めてイエス様は行動なさったのです。その意味でイエス様と私たちは全然違います。

けれど、空中で主にお会いした瞬間、私たちはイエス様に似た者となります。想像できません。考えられもしません。しかし、聖書はそう語っているから必ずそうなります。私たちは、主イエス様とともになるということです。

イエス様はお出でになります。ですから、準備をしなければなりません。もし、準備がなければ、後で必ず後悔します。将来に備えるために、もちろん私たちは将来のことを知らなければなりません。ですから、パウロは知ってもらいたいとはっきり書いたのです。

イエス様の再臨の日は、大きな啓示の日です。

・第一番目。イエス様が、信じる者の前に姿を現わされる日です。

・第二番目。イエス様に属する者が、イエス様の前に姿を現わす日でもあります。

私たちは、イエス様の本当の姿を見るのです。それは素晴らしい瞬間です。今は想像で

きません。目に見えないお方はその覆いを脱ぎ捨てて、私たちの目の前に深い愛と聖さに包まれて、またこの上もなく力強い神聖さと栄光に包まれて、イエス様はお立ちになるのです。

瞬間的なことを、イエス様の三人の弟子たちは経験したでしょう。マタイ伝の17章を読むと、次のように書かれています。いわゆる変貌山の話です。

マタイの福音書 17章1節、2節

それから六日たって、イエスは、ペテロとヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に導いて行かれた。そして彼らの目の前で、御姿が変わり、御顔は太陽のように輝き、御衣は光のように白くなった。

弟子たちにとって忘れられない経験でした。「今からここで過ごそう」とペテロは思ったのです。もう戻りたくない。

この山の上におけるイエス様の変容は、来たるべき日に私たちが見るであろうところのもの、単なる予告に過ぎません。イエス様は再びお出でになります。

一人のみ使いは、次のように弟子たちに言ったのです。

使徒の働き 1章11節

「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」

イエス様は再び来られます。この日は、イエス様が昇天された日と全く同様に確かです。歴史的な事実となります。イエス様はあの時、信者たちの目の前で天に昇って行かれたのと同じように現われます。イエス様の再臨の日は、信者たちの前にイエス様がお姿を現わされる日です。

しかしそれだけではなく、今話しましたように、イエス様の前に信じる者が現われる日でもあります。その日には、本当に信じていた人々、すなわちイエス様との有機的な結びれを持っている人々が明らかにされます。今は分かりません。

私たちは、「あの兄弟は真面目で熱心でいつも集会に来るから大丈夫。心配ない」と思うかもしれません。けれど主は、「違います。まだです」とおっしゃるかもしれません。あるいは、私たちは「あの姉妹は中途半端ではないか。まだまだ」と思うかもしれませんが、主は「違います。あの姉妹はわたしのものです」という判断をなさるかもしれません。

結局、私たち人間には分かりません。私たちは外側のことしか見えないので分からないのです。けれど、その日には、はっきり分かります。その日、信者たちは分かります。

マタイ伝25章。主が、ある信じる者におっしゃったみことばです。

マタイの福音書 25章22節、23節

「二タラントの者も来て言った。『ご主人さま。私は二タラント預かりましたが、ご覧ください。さらに二タラントもうけました。』その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんのお金を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』」

本当によいお褒めことばではないでしょうか。逆のことばも書いてあるのです。山上の垂訓の終わりのほうに。マタイ伝7章21節からです。このみことばを読むと、大変だとしか考えられません。

マタイの福音書 7章21節から23節

「わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』」

ここで、「ある者」と書いてあれば一部分の人と思えるのですが、ここには「大ぜいの者」と書いてあります。このことばを聞くようになる人々の将来は、真っ暗やみです。

イエス様は、「わたしはわたしの羊を知っている」とおっしゃったのです。結局、へりくだった人たちをイエス様はよく知っておいでになり、決してお捨てになりません。けれども、へりくだらなかつた人たちが預言をしていました。(預言をすることとは、みことばを宣べ伝えることです)。「私たちはみことばを宣べ伝えたいでしょう。私たちはあなたの名によって悪霊を追い出したではありませんか。あなたの名によって奇蹟を行なったではありませんか」。しかしその人たちは、主に頼らないで、悪魔の力によって行なったのです。それはあり得ることです。

結果としてみことばを宣べ伝えても、悪霊を追い出しても、奇蹟をたくさん行なっても、これは不法をなすことになるのです。「わたしは認められない。わたしはあなたたちのことを全然知らない」と。

最初に読んでいただきましたマタイ伝25章に出てくる乙女たちは、五人の愚かな乙女と五人の思慮深い乙女の二つに分けられます。この大きな決定が行なわれるのです。

この愚かな乙女たちは、ランプ、形式、外部の入れ物を持っていますが、彼女たちは、油と中身とまことのいのちを持っていませんでした。つまり、彼女たちはみことばを聞き、祈り、聖書も読んだでしょうが、それは形だけでした。けれど、思慮深い乙女たちは、油、すなわち聖霊とまことのいのちそのものを持っていたのです。

その日は、愚か者と思慮深い者を分かち、その一方には、「わたしはおまえたちを全く知らない」と言われ、もう一方には、「お入りなさい」と言われるのです。イエス様のからだの肢体である者だけが、確実に明らかになります。エペソ書 5 章 3 0 節に、  
エペソ人への手紙 5 章 3 0 節

**私たちはキリストのからだの部分だからです。**

とあります。

イエス様は信者たちをお呼びになり、そして彼らはイエス様のほうに向かって急ぎます。墓から、海から、または信じる者のからだのあるところどこからも、この、偉大な第一の復活の日をともに祝うために、よみがえるようになります。

またその日、この地上で永遠のいのちを持っている救われた人たちは特権を持っていて、彼らは死を見ず、墓を知らず一瞬にして変えられ、一瞬にしてよみがえりのからだをいただくようになります。

本当に救われたすべての人たちのためには、その救われた者たちが、その日に死んだにしろ、生きる者として数えられるにしろ、この日は、「死に対する勝利」の日となるのです。救われた人たちは新しいからだを持って、イエス様にお会いするようになります。この、私たちのからだは、イエス様のよみがえりのからだと同じである栄光のからだです。

コリント第一の手紙の中で、この出来事について次のように書き記されています。  
コリント人への手紙・第一 1 5 章 2 3 節

**しかし、おのおのにその順番があります。まず初穂であるキリスト、次にキリストの再臨のときキリストに属している者です。**

キリスト教に入った者と書いてありませんし、洗礼を受けている者とも書いてありません。よく勉強した人々でも、よい人になろうと努力する人でもありません。「キリストに属する人」。つまり「イエス様に属しているかどうか」、大切なことはそれだけです。

空中再臨の箇所は、5 1 節から 5 2 節に書かれています。  
コリント人への手紙・第一 1 5 章 5 1 節、5 2 節

**聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。**

その日には、また多くのことが起こります。私たちがキリストにお会いしたということ

が明らかになります。そしてキリストにおいて新しく造られた者は、一瞬にして完全な者とされます。キリストと同じ姿に変えられるのです。

初代教会の人たちは、この事実について考えただけでなく、確信していました。ヨハネ第一の手紙を読むと分かります。

ヨハネの手紙・第一 3章2節

愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。

なお私たちの身についているすべての汚れは聖め落とされ、私たちの「うちにあるイエス様」は素晴らしい形となられて、お姿を現わされるのです。

そのとき、次のみことばが全く完成されます。すなわち、『古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。(第二コリント 5章17節)』と。蝶がさなぎを脱ぎ捨て、羽を広げると同様に、古きものは私たちの中から取り去られ、そこにはただ新しいものがあるのです。

この世で最も大きな悩みであった罪がこの瞬間に、全く無くなる時であり、すべてが新しくなり、私たちの願いは完全に満たされる時なのです。

しかし、その偉大な日には、私たちの全生活もまた、イエス様の光の前に現わされるのです。心の中にイエス様の姿を宿している救われた一人一人は、イエス様の恵みの座の前に立つようになるのです。

コリント第二の手紙5章10節。ここでパウロは、なかなか成長しなかったコリントにいる兄弟姉妹に書いたのです。

コリント人への手紙・第二 5章10節

私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。

「私たち」とは、主の恵みにあずかるようになった救われた者です。

天国か地獄か、ではありません。彼らはもうすでに救われていた人々でした。一度救われた人々は永久に救われています。けれど報われない可能性があります。

例えば、パウロの同労者のひとりデマスという男がいました。おそらくパウロによって導かれ、救われ、「イエス様のために働きたい」と思い、パウロの同労者となったのです。一緒に祈りましたし、一緒に賛美しましたし、一緒に礼拝しました。けれど、あるとき彼は、「もう嫌です」ということになって、楽な道を選んだのです。パウロは、「彼は私から離れて再びこの世を愛するようになった」と書いています。「失われた」ではありません。

ただ「この世を再び愛するようになった」と。結局、妥協してしまったのです。ですから天国へ行っても報いが無いのです。実を結ばないのちだったのです。せつかく救われたのに…。

聖書には二つのさばきがあると書いていますが、それは、栄光かまたは破滅かを決定するさばきではありません。その日、この世における一人一人の救われた者の生活、働きが、主の火によって試されるだけなのです。すなわち、信じる者が行なった結果によって、主は救われた人々に報酬、栄冠をお与えになるのです。

コリント第一の手紙を読んでも、やはり「信じる者は分けられるようになる」とはっきり書かれています。3章の11節。

コリント人への手紙・第一 3章11節から15節

というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現われ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。

原語を調べると、「助かる」と書いてないのです。「救われます」と。すなわち救われた人は、すでに救われています。一度神の子とされた者が、次に悪魔の子になることができません。しかし、報いを受けられるかどうかは別問題なのです。

この個所によると、「ある人は損害を受ける」。「ある人は報いを受ける」と書かれています。私たちはどちらなのでしょう。その日が私たちの生活を明らかにします。すなわちその日が金、銀、宝石と、木、枯れ草、わら、つまりイエス様から出たことか、または自分から出たことかが明らかにされるのです。

もし主が、「良い忠実なしもべだ。主人の喜びをともに喜んでくれ」と言うことがお出来になれば、何という幸いなことでしょう。

結局、私たちの生活に何が残るのでしょうか。

初代教会の人たちは妥協せず、イエス様だけを仰ぎ見たのです。どんなに憎まれても、迫害されても、殺されてもそれに関係なく、彼らは何を思ったかと言いますと、ローマ書8章18節です。

ローマ人への手紙 8章18節

今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。

これを書いたパウロは、考えられないほど悩みました。苦しみました。想像できません。コリント第二の手紙を読めば少しずつ分かります。パウロは自分の悩みについて、苦しみについてあまり書きたくなかったようです。けれど、コリント第二の手紙は少し違います。彼は本当に悩みました。七年間、刑務所の中で過ごしたのです。一週間ではありません。七年間。彼は幸せだとあまり考えませんでした。あとで振り返ってみたとき、もちろん少し分かったと思います。

けれど、彼よりも私たちはよく分かっています。「良かった！パウロが刑務所に入ったのは。多くの手紙が残されたから」と。彼の手紙が聖書として残ることなどは、夢にも思わなかったでしょう。しかし私たちのために必要だったのです。

彼はローマにいる人々に何を書いたかと言いますと、11節です。

ローマ人への手紙 13章11節

…あなたがたが眠りからさめるべき時刻がもう来ています。…

もう眠っているときではありません。命がけで福音を宣べ伝えましょうと、彼はそのように信じる者を励ましたのです。

主とお会いすることを目指して急ぎたいなら、私たちはキリストのものとならなくてはなりません。キリストのものとなることはもちろん簡単です。へりくれば、正直になれば、イエス様は喜んで受け入れてくださいます。

そして、イエス様によって受け入れられた者は、やはりイエス様を第一にすべきなのではないでしょうか。手紙の中でいろいろな厳しいことばが書いてあります。「貞操のない人たち」と、ヤコブは書いたのです。「主にあつて愛する兄弟姉妹」ではありません。彼らは中途半端な態度を取ったからです。

イエス様は来られます。あるいは今日かもしれません。「今日かもしれない」という希望の光によって、毎日自分を意識して捧げることそのことを、主は期待しておられます。

私たちは確かにいろいろなことを計画します。けれども心の中で、「再臨によって自分の計画が全部無効になるように」と考えるべきではないでしょうか。

「イエス様の再臨は近い」。「イエス様はすぐに来られる」と考えるなら、今までより更に福音を宣べ伝えるべきではないでしょうか。今も救われていない家族の人たち、親戚、友人たちのために祈るべきではないでしょうか。

初代教会の人々は、いろいろなことばで挨拶したらしいのです。ある挨拶は、「主は来たりたもう」という挨拶だったそうです。ですから、本当に嬉しいことではないでしょうか。

主とともにすることとは、考えられないほど素晴らしい事実ではないでしょうか。

了